

長岡京左京三条四坊十六町跡
発掘調査報告書

2025年

特定非営利活動法人平安京調査会

例 言

- 1 本書は京都市伏見区久我森ノ宮町 6-7～11、6-14・15、6-17・18、6-35、6-41・42、6-45～53、6-62・63で実施した、長岡京左京三条四坊十六町跡の遺跡発掘調査報告書である。
(京都市番号 24NG483)
- 2 調査は宅地開発工事に伴い実施した。長岡京跡左京 701次調査である。
- 3 現地調査は株式会社トラストホームから依頼を受けた、特定非営利活動法人平安京調査会(以下、「平安京調査会」という)に委託され、吉崎 伸が担当した。
- 4 調査期間は令和7年4月7日から4月23日である。
- 5 面積は 297m²である。
- 6 本文、図中で使用した調査位置図は京都市発行の都市計画基本図(縮尺 1: 2,500)「久我」を調整して使用した。
- 7 本文・図中の方位・座標は世界測地系による。標高は T.P.(東京湾平均海面高度)である。
- 8 土層名および出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
- 9 本書の執筆・編集は吉崎 伸が行った。
- 10 現地の記録写真撮影は吉崎 伸が行い、出土遺物の撮影は九鬼みづほが行った。
- 11 調査にかかる資料は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。
- 12 発掘調査および整理作業の参加者は以下のとおりである。
〔発掘調査〕吉崎 伸(平安京調査会)
作業員 岸波敏明・小西 敏・土肥正照・多田光利・友重文彰
〔整理作業〕株式会社コンピュータ・システム、平尾政幸、岸波敏明
- 13 出土遺物の年代観は、平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年による。
- 14 本調査の検証審査員は鈴木久男 京都産業大学客員教授である。
- 15 発掘調査、整理作業において、下記の方からご指示ご指導をいただいた。記して感謝いたします。
(敬称略) 高橋 潔・辰巳陽一・大西晃靖(株式会社文化財サービス)

目 次

第Ⅰ章	調査の経緯	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査経過	2
第Ⅱ章	遺跡	4
1.	周辺の環境	4
2.	既往の調査	4
第Ⅲ章	遺構	7
1.	基本層序	7
2.	鎌倉時代の遺構	7
3.	江戸時代の遺構	10
第Ⅳ章	遺物	11
	土器類・瓦類	11
第Ⅴ章	まとめ	13

図 版 目 次

図版 1	遺構 1. 調査区全景 (俯瞰：上が北)
図版 2	遺構 1. 調査区より北西を望む (南東から) 2. 調査区より南東を望む (北西から)
図版 3	遺構 1. 調査区東側 (北から) 2. 調査区西側 (東から)
図版 4	遺構 1. 溝 1 断面 (北から) 2. 溝 8 断面 (南から) 3. 溝 10 断面 (南から)
図版 5	遺構 1. 東壁断面 (西から) 2. 東壁断面 11 層 (西から)

図版 6 遺物(土器類・瓦類)

1. 溝 1・7・8 出土遺物
2. 重機掘削に伴う遺物

挿 図 目 次

図 1	調査位置図(1:5,000)	1
図 2	調査区配置図(1:1,000)	2
図 3	調査経過写真	3
図 4	南壁・西壁断面図(1:100)	8
図 5	調査区平面図(1:100)	9
図 6	久我里比定図(1:3,000)	14

表 目 次

表 1	遺構概要表	10
表 2	遺物概要表	12

第Ⅰ章 調査の経緯

1. 調査に至る経緯（図1）

調査地は京都市伏見区久我森ノ宮町 6-7～11、6-14・15、6-17・18、6-35、6-41・42、6-45～53、6-62・63 番に所在し、長岡京左京三条四坊十六町に該当している。ここで宅地開発計画が持ち上がったため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）が試掘調査を行ったところ、長岡京に関すると思われる遺構が検出されたため、土地の所有者である株式会社トラストホームに発掘調査の指導がなされた。指導を受けた株式会社トラストホームは特定非営利活動法人平安京調査会に調査を委託し、委託を受けた平安京調査会が担当して発掘調査を行った。長岡京跡左京 701 次調査である。



図1 調査位置図(1:5,000)

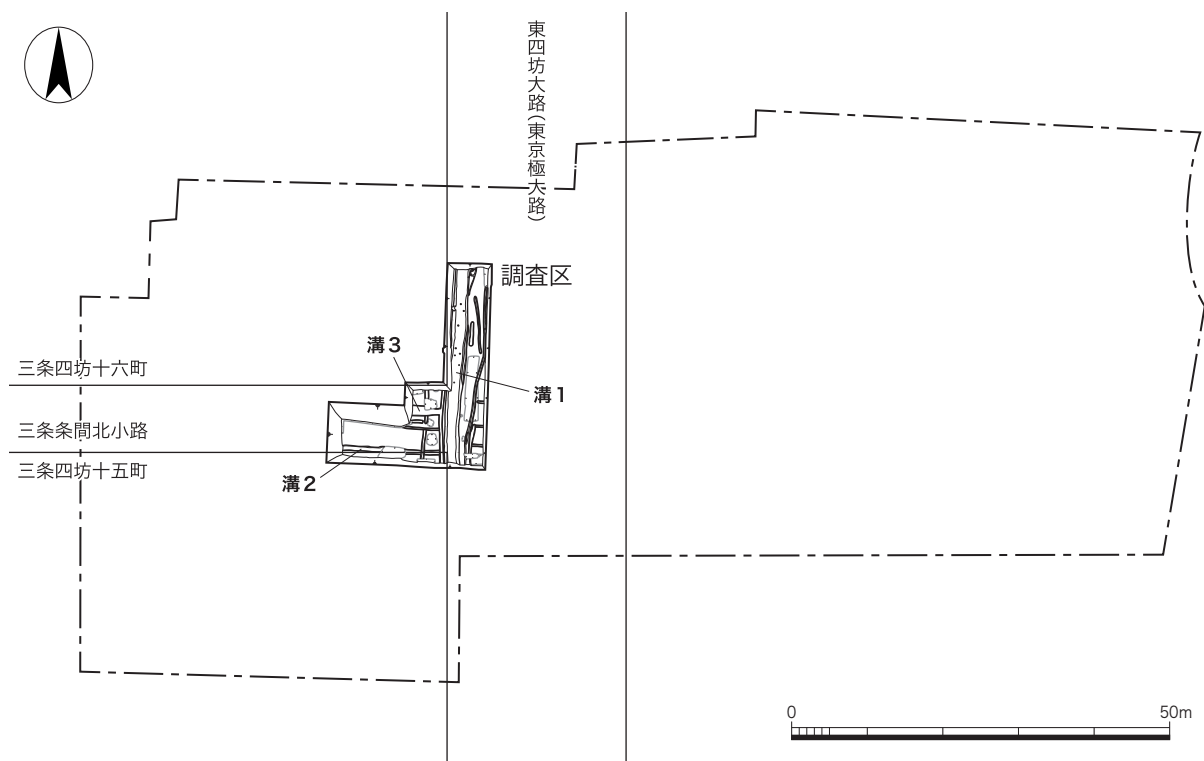


図2 調査区配置図(1:1,000) (旧長岡京条坊復元図による)

2. 調査経過

調査は令和7年4月7日に調査区を設定し、重機掘削を開始した。調査区は旧長岡京条坊復元図(註1)によると東四坊大路と三条条間北小路との交差点付近にあたると推定され、ここに逆L字型の調査区(東部分:南北29m・東西6m、西部分:南北7m・東西15m、屈曲部に東西5m・南北3mを付加)面積294㎡を設けた。ところが重機掘削を開始した時点の文化財保護課の検査において、この調査区では試掘調査時に検出した長岡京期と推定される溝が確認できないことが指摘された。このため急遽、調査区南側を1m拡張し、代わりに北側を2m分減らし、試掘時の溝の範囲を含める形で面積297㎡の調査を行った。重機掘削の後遺構検出を行い、調査区の中央部で南北方向の江戸時代の大溝、調査区全域で鎌倉時代の小溝群を検出した。4月15日からは遺構の掘り下げを開始し、4月18日には完掘した遺構の全景写真、ドローンによる3D撮影を行った。4月21日には検証審査委員である鈴木久男教授の検証を受けた。その後、原因者から調査区の埋め戻しの必要がない旨が伝えられたため、4月23日には全ての作業を終え調査を終了した。

註1 『向日市埋蔵文化財調査センター年報 都城10 付載:創立10周年記念論文集・長岡京条坊復元図』
向日市埋蔵文化財センター 1997年:の復元図を「旧長岡京条坊復元図」と仮称する。



1. 調査区設定



2. 重機掘削



3. 遺構掘削作業



4. 文化財保護課の検査



5. 基準点測量



6. ドローンによる3D撮影



7. 検証審査委員の検査



8. 調査終了状況

図3 調査経過写真

第Ⅱ章 遺跡

1. 周辺の環境

調査地は京都盆地南西部の乙訓地域に位置し、向日丘陵から流下する西羽東師川などの小河川や桂川の氾濫原によって形成された平野部の一面にあたる。長岡京が造営されると左京の東端部となり、平安京遷都後は水田地帯として利用され、近年までその景観を保っていた。しかしながら最近では、西側から工場や配送センターなどの工場が、東側からは住宅が迫り、急速にその環境が変わりつつある。

調査前の当地は宅地造成地予定地となっており、中央部に廃絶した水路が南北に走り、水路を挟んで西側は畑地跡、東側は水田跡となっていた。西側の畑地跡は標高 12.1 m、東側の水田跡は標高 11.7 m前後で、西側が高く東側が低い地形であった。

2. 既往の調査（図 1）

当地は新長岡京条坊復元図（註 1）によれば長岡京三条四坊十六町跡の南東部に推定される。当地周辺では、近年の工場・宅地開発に伴い発掘調査がおこなわれており、長岡京に関連した遺構が検出されつつある。ここでは左京三条四坊の範囲を中心として、その成果を述べる。

① 発掘調査 名神高速道路拡幅関連の発掘調査 D-A 2 区、左京二条三坊十二町に該当し、長岡京期の南北棟掘立柱建物 1 棟、東西棟建物 2 棟が検出されている（註 2）。

② 試掘調査 左京二条四坊四町、三条四坊一町、東四坊坊間西小路、二条大路に該当し、長岡京期の東四坊坊間西小路東側溝・二条条間南小路北側溝、時期不明の落ち込み・溝・ピットを検出している（註 3）。

③ 発掘調査 左京二条四坊五・十二町、東四坊坊間小路、東四坊坊間西小路に該当し、古墳時代の流路・溝・土坑、長岡京期の東四坊坊間小路東側溝・溝・柱穴を検出している（註 4）。

④ 試掘調査 左京二条四坊五・十二町、東四坊坊間小路に該当し、長岡京期の東四坊坊間小路西側溝を検出している（註 5）。

⑤ 試掘調査 左京二条四坊五・十二町、東四坊坊間小路、東四坊坊間東小路に該当し、長岡京期の東四坊坊間小路東側溝を検出している（註 6）。

⑥ 試掘調査 左京三条四坊八町、二条大路、東四坊坊間小路に該当し、中世の小溝群を検出している（註 7）。

⑦ 発掘調査 西羽東師川改修工事に伴う発掘調査の（1・2-1・2-2 区・農道 4 トレンチ）で、左京三条三坊十四・十五町、三条四坊三・四町・東三坊大路、三条条間南小路に該当している。1 区では三条条間南小路南側溝掘立柱建物、2 区では東三坊大路西側溝、弥生時代の溝を検出している。農道トレンチ 4 では中世の小溝群を検出している（註 8）。

⑧ 発掘調査 西羽東師川改修工事に伴う発掘調査（2・3・7・8・9区）で左京三条三坊十四町・三条四坊三・四町に該当する。2区では東三坊大路の東西両側溝、弥生時代の落ち込み、縄文土器を検出している（註9）。

⑨ 発掘調査 左京三条三坊十五・十六町、三条四坊一・二町、東三坊坊間東小路、東三坊大路、三条条間北小路に該当している。縄文時代後・晩期から弥生時代の湿地、弥生時代の溝、長岡京期の東三坊大路東西両側溝、掘立柱建物、柵列、区画溝、中世小溝群を検出している（註10）。

⑩ 発掘調査 左京三条四坊六町に該当し、縄文時代晩期の流路、弥生時代の湿地・溝、古墳時から飛鳥時代の溝、長岡京期の掘立柱建物・柱列・溝・湿地、中世の小溝群を検出している（註11）。

⑪ 発掘調査 左京三条四坊六町に該当し、縄文時代晩期の流路、弥生時代の湿地・溝、長岡京期の掘立柱建物・柱列・井戸・溝・湿地、中世の小溝群を検出している（註12）。

⑫ 発掘調査 左京三条四坊九町に該当し、長岡京期の掘立柱建物、井戸、中世の小溝群、室町時代の土坑を検出している（註13）。

⑬ 発掘調査 左京三条四坊十・十一町、三条条間小路に該当し、長岡京期の三条条間小路南北両側溝・掘立柱建物・土坑、中世の小溝群・柱穴を検出している（註14）。

⑭ 試掘調査 左京三条四坊十二町、四条四坊九町、三条大路に該当し、長岡京期の三条大路南北両側溝、中世の小溝群を検出している（註15）。

⑮ 発掘調査 左京三条四坊十三町、東四坊大路に該当し、鎌倉時代から室町時代の溝・畔・土坑を検出している（註16）。

⑯ 発掘調査 三条四坊十三町、四条四坊九町、三条大路に該当し、古墳時代の溝、長岡京期の三条大路南北両側溝・掘立柱建物・柵列・井戸・土坑、平安時代以降の小溝群を検出している（註17）。

以上、左京三条四坊の一带は、比較的調査例が少なく、長岡京期の遺構の密度が低い傾向にある。

- 註1 公益法人京都市埋蔵文化財研究所がこれまでの発掘調査で検出した長岡京条坊関連の遺構をもとに修正した条坊復元図を「新長岡京条坊復元図」と仮称する。京都市埋蔵文化財研究所から提供を受けた。
- 註2 「(2) 長岡京跡左京第303・314・315次」『京都府遺跡調査概報 第61冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995年
- 註3 「V-8 長岡京左京二条四坊・三条四坊跡 No.85」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成21年度』京都市文化市民局 2011年
- 註4 『長岡京左京二条四坊五・十二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-5 (公財)京都市埋蔵文化財研究所 2014年
- 註5 「VI 試掘調査一覧表 No.118」『京都市内遺跡試掘調査報告 令和2年度』京都市文化市民局 2021年
- 註6 「VI 試掘調査一覧表 No.117」『京都市内遺跡試掘調査報告 令和2年度』京都市文化市民局 2021年
- 註7 「VI 試掘調査一覧表 No.119」『京都市内遺跡試掘調査報告 令和2年度』京都市文化市民局 2021年
- 註8 「30 長岡京左京二・三条三・四坊」『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- 註9 「37 左京三条三・四坊」『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1985年
- 註10 「34 長岡京左京二条三・四坊」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988年
- 註11 『長岡京左京三条四坊六町跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告2013-3 (公財)京都市埋蔵文化財研究所 2013年
- 註12 『長岡京左京三条四坊六町跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告2018-4 (公財)京都市埋蔵文化財研究所 2018年
- 註13 『長岡京左京三条四坊九町跡発掘調査報告書』文化財サービス発掘調査報告書34集 株式会社文化財サービス 2025年
- 註14 『長岡京左京三条四坊十・十一町跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告2008-16 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年
- 註15 「V-7 長岡京三条・四条四坊」『昭和55年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 註16 『長岡京左京三条四坊十三町跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告2006-17 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 註17 「66 長岡京左京三条・四条四坊」『昭和55年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2011年

第Ⅲ章 遺構

1. 基本層序（図4）

調査区中央部の廃絶した水路を挟み、東西で土層の堆積が異なる。調査区西側の畑地跡は地表から1.2 m以上が現代盛土で、その下層はすぐに地山の23層：黄褐色粘質土（2.5Y4/1）であった。地山面の標高は約11.0 m前後である。ここには本来中・近世・近代の水田を形成した土層が堆積していたはずであるが、それらはすべて削平され、現代盛土に代わっている。これに対して東側は地表面から現代の4層：耕作土（2.5Y4/1：黄灰色泥土）0.2 m、7層：床土（2.5Y4/4：オリーブ褐色砂泥）0.1 m、8層：近世耕作土（2.5Y5/2：暗灰黄色泥土）0.2 m、11層：室町時代の堆積土（10YR5/2 灰黄褐色砂泥と10YR6/2 灰黄褐色微砂の互層）0.2 m、18層：鎌倉時代の耕作土と推定される土層（2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥）0.2 mと続き、その下は西側と同じ23層：地山層であるがその上面の標高は10.8 m前後である。地山で比較すれば西側が一段高く、東側が低い地形となる。

遺構はすべて地山面で検出した。検出した遺構は江戸時代の大溝、鎌倉時代の小溝群で、長岡京期の遺構は確認できなかった。

2. 鎌倉時代の遺構（図5、図版3、図版4－2・3）

調査区の東西で東西方向と南北方向の小溝群を検出した。

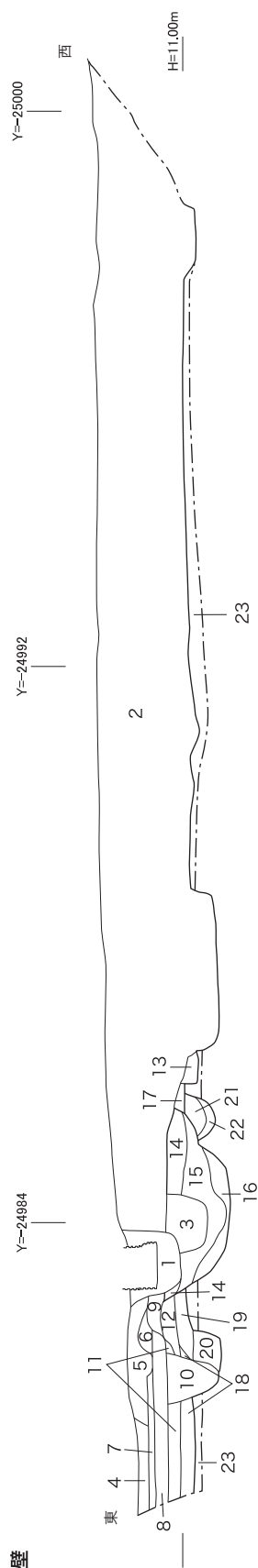
溝2～7 調査区の西側で検出した溝である。この内溝4・7は南北方向、その他は東西方向である。素掘りの溝で、規模は幅0.3～1.5 m、深さ0.1～0.4 mである。埋土はほぼ全て2.5Y4/1 黄灰色粘質土で、重複関係は明確でなく時期差は認められない。この内溝2は試掘調査で確認した三条条間北小路の南側溝とされた溝であるが、他の溝と同様な埋土で重複関係も明確でないことから、同じ小溝群の一つと考えられる。

溝9～14 調査区の東側では検出した溝である。8～10・14は南北方向、11～13は東西方向である。

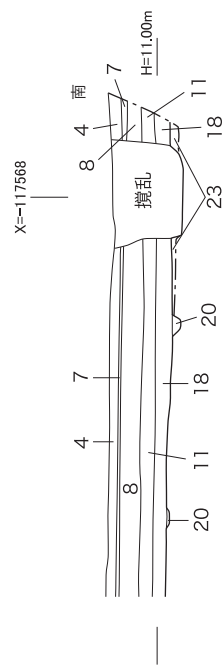
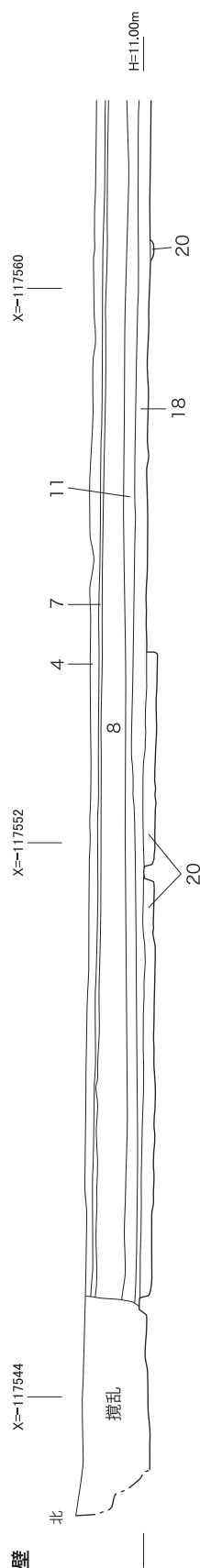
素掘りの溝で、規模は幅0.3～0.7 m、深さ0.1～0.4 mである。埋土は西側のものと同じく2.5Y4/1 黄灰色粘質土である。この内南北方向の溝8に対して一定間隔で配置された溝11～13が合流した状況を示しており、一連の溝であることがわかる。溝8からは土師器片がわずかに出土している。

これらの小溝群の上層には耕作土とみられる18層が堆積しているが、小溝はそれに対する排水対策の溝と考えられる。溝からは古墳時代の須恵器、奈良時代から平安時代とみられる土師器・瓦がわずかに出土しているが、溝の時期は鎌倉時代と推定される。

南壁



東壁



- | | | | |
|----|---------------------------|----|---------------------------------|
| 1 | 10YR5/1 褐灰色泥土 (現代溝) | 13 | 2.5Y5/3 黄褐色砂泥 + 7.5Y5/1 |
| 2 | 10YR4/2 灰黄褐色泥土 (現代盛土) | | 灰色粘質土ブロック混 (植栽痕) |
| 3 | 5Y4/1 灰色泥土 (近代溝) | 14 | 5Y5/2 オリーブ褐色粘質土 |
| 4 | 2.5Y4/1 黄灰色泥土 (現代耕作土) | 15 | 5Y5/1 オリーブ黒色粘質土 |
| 5 | 2.5Y4/2 暗灰黄色土 | 16 | 5Y4/3 暗オリーブ色粘質土 |
| 6 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 | 17 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (中世耕土) |
| 7 | 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥 (床土) | 18 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 マンガン多量 (鎌倉時代耕作土) |
| 8 | 2.5Y5/2 暗灰黄色泥土 (近世耕作土) | 19 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (畔) |
| 9 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (畔) | 20 | 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (溝8) |
| 10 | 10YR5/1 褐灰色粘質土 (植栽痕) | 21 | 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 |
| 11 | 10YR5/2 灰黄褐色砂泥 + 10YR6/2 | 22 | 2.5Y5/4 黄褐色粘質土 |
| | 灰黄褐色微砂の互層、5単位あり (室町時代堆積土) | 23 | 10YR4/4 褐色砂泥 (地山) |
| 12 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (畔) | | |

図4 南壁・東壁断面図(1:100)

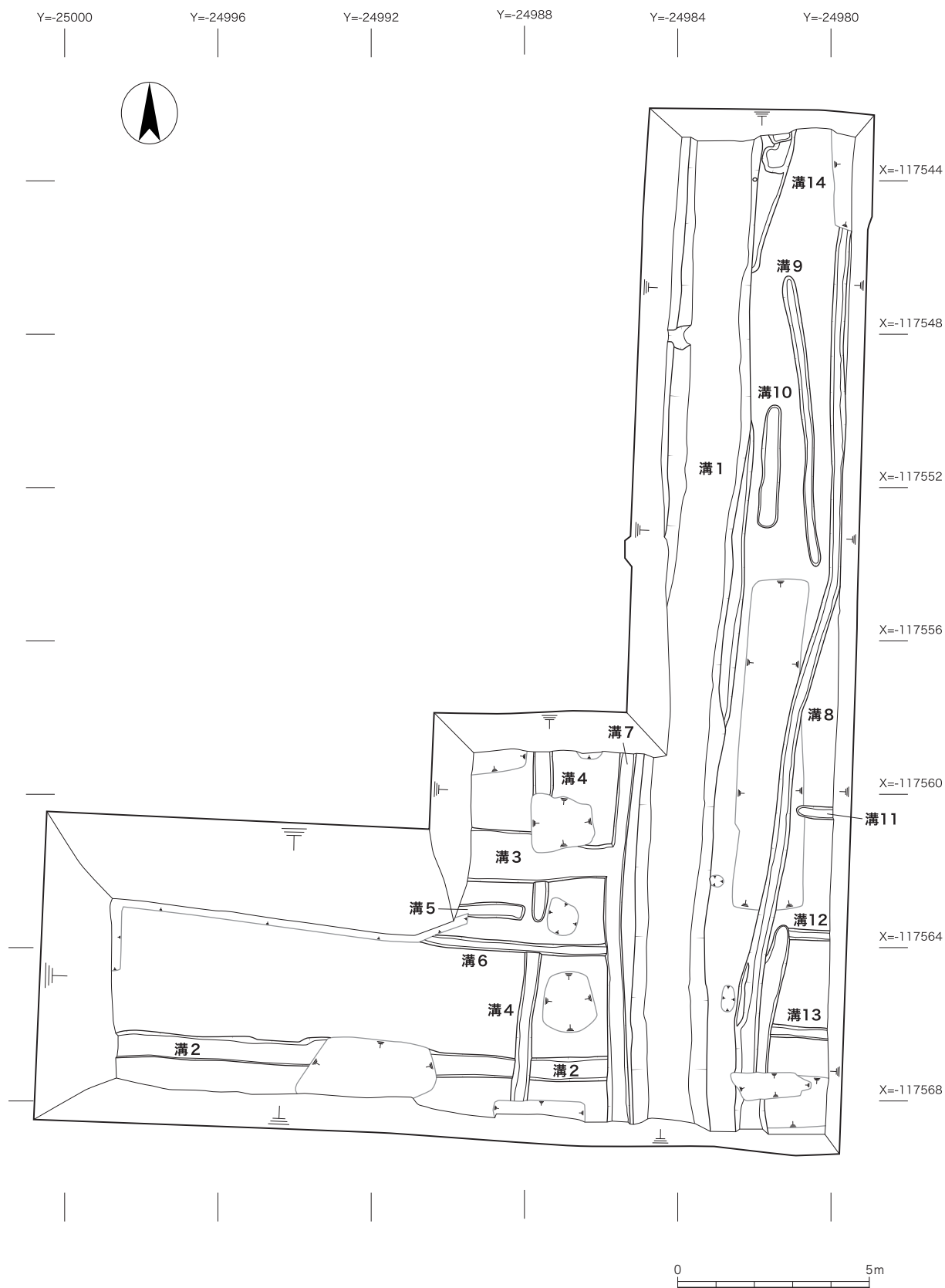


図5 調査区平面図(1:150)

3. 江戸時代の遺構（図5、図版4－1）

溝1 調査区の中央部を南北に貫く大型の溝である。検出面での規模は幅2.2 m、深さ0.6 mであるが本来は11層の上面から成立する溝であり、その規模は幅2.8 m、深さ0.9 mを測る。この溝には護岸施設は認められない。埋土は3層認められ、上から14層：(5Y5/2 オリーブ褐色粘質土)、15層 (5Y5/1 オリーブ黒色粘質土)、16層 (5Y4/3 暗オリーブ粘質土) である。この溝からは江戸時代の施釉陶器、室町時代後期の焼締陶器などが出土している。

また、その位置からこの溝は条里境の水路と推定され、後継である近代の溝：3層 (5Y4/1 灰色泥土)、現代の溝：1層 (10RY5/1 褐灰色泥土) がほぼ同じ位置に存在している。

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
鎌倉時代	溝2～14	小溝群
江戸時代	溝1	条里境溝

第IV章 遺物

今回の調査では古墳時代から江戸時代の遺物が出土している。土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・瓦で出土量は少ない。

土器類・瓦類（図版6）

溝7出土遺物（1・2）須恵器と瓦が出土している。

1は須恵器の高杯脚部で、透かしの痕跡は認められない。焼成は良好で、胎土は砂粒が少なく密である。色調は青灰色（5PB6/1）である。古墳時代のものと考えられる。2は平瓦の破片で凸面には縄タタキ、凹面には布目の痕跡が認められる。焼成は不良で軟質、胎土は砂粒が少なく密である。色調は浅黄色（2.5Y7/3）である。奈良から平安時代のものと考えられる。

溝8出土遺物（3）土師器が出土している。

3は器壁のやや厚い土師器であるが機種は不明。焼成は良好で、胎土は砂粒が少なく密である。色調は黄色（2.5Y8/6）である。時期は不明。

溝1出土遺物（4～7）須恵器・施釉陶器・焼締陶器が出土している。

4は瀬戸・美濃系の長石釉碗の口縁部である。内外面に釉薬がかかるが外面下部には及ばない。焼成は良好で、胎土は密で砂粒は含まない。釉薬の色調は灰白色（2.5Y8/1）、胎土の色調は橙色（7.5YR7/6）である。5は備前焼の播鉢である。片口部分が一部残存している。口縁部は帯状に立ち上がり、内外に強いロクロ目が残る。内面には7条の摺り目が施されている。焼成は良好で硬緻、胎土は砂粒が少なく密である。色調は暗赤褐色（2.5YR3/3）である。6は常滑の甕体部の破片である。焼成は良好である。胎土は細かい砂粒を含み、硬緻である。色調は褐灰色（5YR4/1）である。7は須恵器の甕体部の破片である。外面は格子目タタキ、内面はナデである。焼成は良好、胎土は砂粒が少なく密である。色調は灰色（N4/）である。4は江戸時代、5・6は室町時代、7は奈良から平安時代のものである。

重機掘削に伴う遺物（8～16）瓦器・須恵器・瓦がある。重機掘削に伴うもので出土層位は明確でないが、主に18層から出土している。

8・9は瓦器で、8は三足羽釜の脚部である。焼成は良好、胎土は細かい砂粒をやや多く含む。色調は黒褐色（2.5Y3/1）である。風化が激しい。9は瓦器碗の口縁部である。器壁は薄く内面に暗文の一部が見える。焼成は良好、胎土は砂粒を含まず密である。色調は青黒色（5PB2/1）である。8・9は鎌倉時代のものである。

10～17は須恵器である。10は杯Aの底部である。焼成は良好、胎土は砂粒を含む。色調は灰白色（N7/1）である。11は皿の底部で、高台は削り出しである。焼成は良好、胎土は砂粒が少なく密である。色調は灰白色（N7/1）である。12～16は須恵器の甕である。12は甕の口縁

部で、屈曲して立ち上がり、内側を軽く摘み上げる。焼成はややあまく、胎土は砂粒わずかに含むが密である。色調は灰白色（5Y7/1）である。13は甕の肩部である。焼成は良好、胎土は砂粒が少なく密である。色調はオリーブ黒色（5Y2/2）である。14～16は甕の体部で、ともに外面は格子目タタキ、内面は青海波のあて具の痕跡を残す。14は焼成良好、胎土は砂粒をやや多く含む。色調は灰色（N4/）である。15は焼成良好、胎土は細かい砂粒を含む。色調は灰白色（N7/1）である。16は焼成良好、胎土は砂粒少なく密である。色調は灰色（N6/）である。

10～16は奈良から平安時代のものである。

17は平瓦である。風化が激しいが凸面には縄タタキの痕跡が残る。焼成は甘く、胎土は砂粒を含む。色調は灰白色（2.5Y8/2）である。奈良から平安時代のものである。

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	A ランク点数	B ランク 箱数	C ランク 箱数
古墳時代	須恵器		1 点		
奈良時代～ 平安時代	須恵器・瓦		10 点		
鎌倉時代	瓦器		2 点		
室町時代	焼締陶器		2 点		
江戸時代	施釉陶器		1 点		
不明	土師器		1 点		
合 計		1 箱	17 点（1 箱）	0 箱	0 箱

第V章 まとめ

ここでは今回の調査によるいくつかの問題点について述べる。

長岡京の条坊遺構が検出できなかったことについて 今回の調査は、試掘調査によって確認された東西方向の溝（溝2）が長岡京の三条条間北小路の南側溝であるか否か、東四坊大路との交差点が確認できるかが主要な調査目的であった。結果的に溝2は中世の小溝群の一つであることが確認され、東四坊大路の遺構も確認できなかった。

この原因としては長岡京の遺構が削平され残存していなかった可能性、低湿地のため長岡京の条坊が施工されていなかった可能性などが考えられる。さらには旧条坊復元図と新条坊復元図のずれによることが考えられる。

遺構が削平あるいは施工されなかったことに関しては、西隣の九町の発掘調査の成果（註1）の成果が参考になる。この調査では長岡京期の建物遺構が標高11.0m前後で検出されている。この標高は今回の調査区西側の遺構検出面（地山面）とほぼ同じである。復元図の位置に条坊関連の遺構が存在したとすれば検出できたはずである。地山の土層もこの付近としては安定しており、条坊の施工に問題が生じるような地盤ではない。

やはり新旧の条坊復元図のずれによるものと考えるのが妥当であろう。今回の三条条間北小路の南側溝と考えられた溝2は旧条坊復元によるもので、新条坊復元では三条条間北小路は南へ30m地点に復元されており、この差によって側溝が検出できなかった可能性が高い。今回はたまたま旧条坊復元図の三条条間北小路の位置に中世の溝が存在したことが原因で条坊側溝と誤認されたものと考えられる。ただ、長岡京の条坊はまだ不明な点が多く、こうした検証が今後も必要であることは言うまでもない。

江戸時代の溝1について 今回の調査区の中央で検出した江戸時代の溝1はその位置から長岡京以降に施工された条里制に伴うものと考えられ、久我里の十一坪と十四坪の境の水路であると推定される（図6）。当地一帯は村上天皇の皇子具平親王の子で臣籍に下った源師房を祖とする村上源氏の家系である久我家が管轄する久我荘に組み込まれており、久我里もその一部である。応永三年（1396）に作成された「久我本荘検注帳」にもその記載が認められる（註1）。

ところでこの溝は調査区東側壁面の11層上面から成立しているが、この11層には極めて特徴的な堆積が認められる。断面図では11層として一まとめに報告したが、本来は層厚1～3cmの細かい砂層と粘質土が互層となって堆積しており、それが5単位程度認められる（図版5-2）。こうした堆積は湿地や沼底に形成されることが多く、氾濫した水によって微砂が運ばれ、水が干上がる過程で泥が堆積することが繰り返された結果であると推測される。したがってこの土層が形成された時期、溝の左岸側は水田ではなく湿地状を呈していたものと推定される。溝1が幅3m、深さ1m近い大規模であるのはこうした湿地状の土地の排水を重視した結果であろうと思わ

図 版



1. 調査区全景（俯瞰：上が北）



1. 調査区より北西を望む（南東から）



2. 調査区より南東を望む（北西から）



1. 調査区東側（北から）



2. 調査区西側（東から）



1. 溝1断面（北から）



2. 溝8断面（南から）



3. 溝10断面（南から）



1. 東壁断面（西から）



2. 東壁断面11層（西から）



1. 溝1・7・8出土遺物



2. 重機掘削に伴う遺物

報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうさきょうさんじょうしぼうじゅうろくちょうあとはつくつちょうさほうこくしょ							
書 籍	長岡京左京三条四坊十六町跡発掘調査報告書							
シリーズ名	特定非営利活動法人平安京調査会発掘調査報告書							
シリーズ番号	第 7 集							
編著者名	吉崎 伸							
編集機関	特定非営利活動法人平安京調査会							
所在地	〒603-8042 京都市北区上賀茂狭間町9番地3号							
発行所	特定非営利活動法人平安京調査会							
発行年月日	2025 年6月 30 日							
所収遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長岡京左京三条 四坊十六町跡	京都市伏見区久我 森ノ宮町 6 -7 他	26100	3	34 度 56 分 24 秒	135 度 43 分 35 秒	2025 年 4 月 7 日 ～ 4 月 23 日	297 m ²	宅地開発
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
長岡京左京三条 四坊十六町跡	都城跡	鎌倉時代		溝		瓦器		鎌倉時代の小溝群・条里に伴う江戸時代の溝を検出した。
		江戸時代		溝		施釉陶器		

長岡京左京三条四坊十六町跡 発掘調査報告書

編集・発行 特定非営利活動法人平安京調査会
〒 603-8042 京都市北区上賀茂狭間町9番地3号
TEL 075-334-5680
<https://heiankyo-tyousakai.com>
コンピュータ・システム株式会社
〒 602-8453 京都市上京区笹屋町4丁目 273 番3
TEL 075-462-5411
<https://www.comsys-kk.co.jp>

発行日 2025 年 6 月 30 日